



全道展交流紙

2019.9

No.58

令和元年 第74回全道展を審査して 全応募作品と対峙する濃密な2日間

総合審査委員長・絵画部門審査委員長 木村由紀子

今年は元号も改まり、全道展も74回展を迎えた。

元年と云うさい先の良い響きの中で、これからの全道展にとって、将来性の持てる作品群に出会える事を大いに期待して審査初日を迎えた。

例年、会員の作品に対する見方、感じ方は様々であるのは言うまでもないのだが、その分色々な意見が交差し、議論を重ね合う事となる。

只、総体的に云えることは、全道展は完成度よりその作品に感じる造形の純度と質の見極めを何より大切に、2日間にわたり審査が進行する。

この審査過程は作品をしっかりと見るという事では何をにおいても大切な事であると思う。

協会賞選考時は例年そうであるように今年も又、議論を重ねて二点選出の協会賞となった。その中澤文隆の作品は、画肌や構成的な組み立てがモノクロ調の画面を引き立てモチーフが明瞭な分、見る側に強い説得力を感じさせる力作だった。これに安住する事なく更に発展させた作品を生み出して欲しいものだ。

昨年に続いて道新賞の金子圭太の作品、先に進むためにも自分を信じて更なるチャレンジを期待する。

会友賞の佐々木ゆかの作品は、女性と水面をこれまでも描いてきたが描ききれないもどかしさがあった。今回は同じモチーフでも画面全体に広がり色彩の美しさという意識の変化が見られた。この調子を大切に今後に期待したい。

変化という事では佳作賞の本山タイの作品も、思い



切った平面構成が成功したと思う。潔い清々しい美しさを感じさせとても良かった。

同じ佳作賞の桔梗智恵美の作品は、好感もてる素直な作品である。

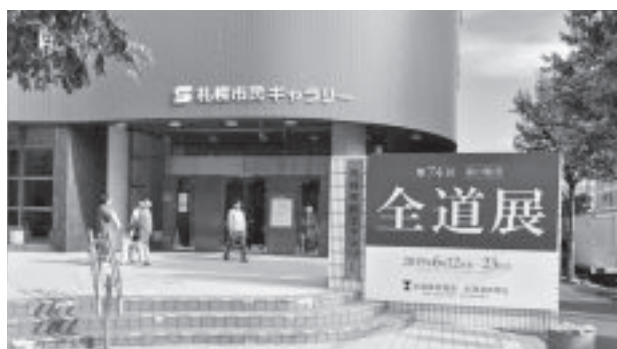
又、佳作賞の滝花保和の作品も良かった。色彩を前回より抑え統一感が出たと思うが、組み立てのバランスやメリハリに一工夫欲しい。

例年の審査委員長のメッセージにもあるように全道展の基本姿勢としては「作品本位である事」と「挑戦する精神性」という事であると思う。

変化を恐れない覚悟と言うものが感じられる精神性の光る作家を応援したいという気持ちで、私も審査に臨んでいるが、自身にも跳ね返る重い言葉であると思う。

作品を完成させて満足できた時とそうで無い時の違いは何か？ 審査を終えていつも思う事である。

自分の作品に対する厳しい姿勢・勇気・あと少しの諦めない気持ちであると……。



絵画、版画、彫刻、工芸の4部門で一般応募数は計394点。このうち最高賞の全道美術協会賞を含む28点が入賞、156点が入選した。それぞれの部門の審査委員長に今年の作品を総括してもらった。

従来の技法に加え 多様な表現方法も登場

版画部門審査委員長
清野 知子

令和元年となり、全道展も第74回展となった。版画部も期待を胸に、いつもの気合の入った審査が始まった。

出品者の減少は続いている。会友の不出品もあり危機感は一層深刻である。上位の受賞を出せなかった事も残念であった。しかし、個々の完成度は上っており最終的に、見応えのある内容となった。次年度も大いに期待したい。



新会員の山田光「苦東厚真 ブラックアウトⅠ」は、社会派のテーマの多い作者らしい作品である。見方の角度で建物が見える画面に深意を感じる。

会友賞の志摩利希「アナベルの夢」は、多彩な技法の背景が、横たわる人物の神秘性を高めている。残念ながら会友賞候補となった、相馬瑞恵のホッケーのスピード感を大胆に切り取った作品は、次への展開が期待される。

新会友の、田中文夫「強いひざしの下で」、射水美栄子「オホーツクより」、長谷川易夫「水辺のコサギ」は、何れも、構成と技法、色彩のバランスが良く、三様の個性が木版刷りの可能性を見せてくれる。

佳作賞は、浅野美江「廃線の跡Ⅰ」、渡邊仙司「アーリーバード…」。

版種の特性が顕著。木々の生い茂る河川に掛かる橋の意味を問う前者。細部にまで拘った加筆で不思議な世界感を作った後者。テーマ展開が期待される。

奨励賞は、生方正俊「あの麦わら帽子」、佐々木千晶「シークレット…」。

色彩が美しい2点と特種な技法で画面に変化をつけた、水野房江「冬のおとずれ」。田中俊二「巡業（旭川場所）」は、真摯に取り組む姿勢が清々しい力作である。

版画も、特別な道具や薬品等を使わない方法が多く紹介されるようになった。それらを利用した自己表現作品が今後、多数出品される事を期待したい。



審査に対する責任を 再認識

彫刻部門審査委員長
川上 勉

公募展を開催する美術団体の会員にはふたつの重要な役割があると私は考えている。ひとつは会員自らの作品を世に問うこと。もうひとつは審査を通してその美術団体の「美」に対する価値基準を形成することである。74回展で彫刻部門の審査委員長を仰せつかり、改めて公募展における審査について考えてみた。

出品者が制作した作品を各部門の会員が審査をする。審査をする会員はおおのの感性に基づいて出品作品について評価をする訳だが、当然、個々の評価と審査の内容は必ずしも一致しない。多数の会員で審査をするので、基本的には票決のシステムで審査がなされるのだが、それが不思議と、単なる多数決にはならない。票決までに議論を重ね、その過程で、その作品に対する評価が形成されるといったイメージだろうか。

74回展では、「個の集団」というテーマが冠されたが、各部門の審査において、おそらくそのテーマを具体化する工夫がなされたことと思う。彫刻部門では、近年出品作品の減少もあり、これまでも作品一点一点について十分に議論を重ねた上での票決を行っていたが、今回展では会員個々がそれぞれの審美眼に基づき評価をした上で票決することを徹底するため、評価について決めかねている会員がいる場合は票決に入らないようにした。些細なことであるが、審査に対する責任を改めて意識することができたと思う。74回展の審査は終わったが、審査の結果、その過程で議論された内容は単に会員個々の記憶に残るだけではなく、全道展という団体の記憶として積み重ねられた。そしてそれこそが会の貴重な財産であることを我々は改めて認識したい。

この原稿を執筆中に、彫刻部岡沼淳一会員の訃報が知らされた。長きにわたり大作を出品され、審査においても中心的な役割を担っていた氏が鬼籍に入られたことは彫刻部としては計り知れないほど大きな痛手である。75回展は岡沼会員がいない審査となるが、今の時点では全くそのことが想像できない。末筆ですが岡沼会員のご冥福を心よりお祈りしたい。

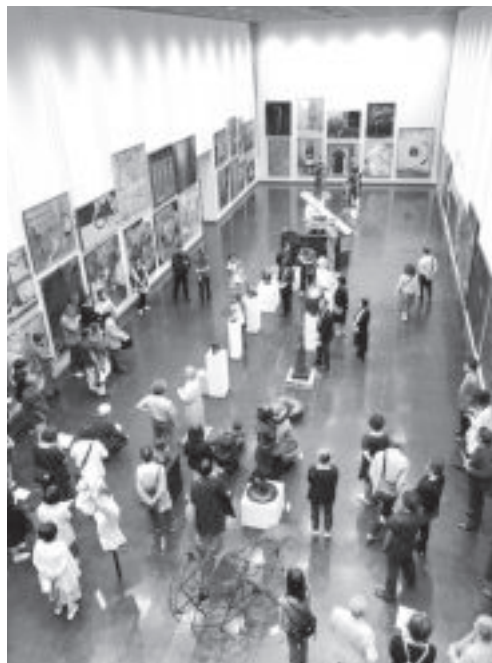


ベテラン、新人ともに 活気づく

工芸部門審査委員長
馬場 雅己

今年の工芸部門は一般応募点数がここ近年では最多の17点となり初出品も7名を数え、数年続いていた出品者の減少に一定の歯止めがかかる形となりました。一般部門の搬入点数の内訳は出品が増加傾向にある染・織が8点（7名）・陶3点・木彫2点・硝子1点・その他3点となりました。今年は初出品の方の作品が多数加わって審査は工芸部門として新しい作家・作品に触れる機会となり、その中からも入賞者が出るなど全体としては活気ある審査となりました。ベテラン・若い作家とも意欲的な作品が受賞につながっていると感じます。

新会友・佳作賞の木俣猛さん。色彩豊かにそしてダイナミックに4枚の織物をつなぎ合わせ一つの夕暮れの風景を表現しています。以前に比べて、細部の見えない部分も丁寧に処理され綺麗な仕上がりでした。佳作賞、宮本瑠美子さん。織の作品。平面の作品ですが織り方や色彩を駆使し立体的な奥行きを感じさせます。新しい表現にチャレンジされていると感じました。奨励賞、木彫



の池田康弘さん。木彫のレリーフ。数年来木彫で花を彫り上げる作品を出品されています。今年の作品は細部まで丁寧に彫り込まれ高評価を得ました。初出品で奨励賞を受賞された、陳俞沁^{チェンユシン}さん。吹き硝子・フュージング・ステンドグラスの様々な技法を使い朝露を表現した作品。台湾出身の若い作家で粗削りですが今後が楽しみです。奨励賞、原あけみさん。織の作品の中にリズミカルな印象を生み出しています。新会員の阿部榮さん。三角をつなぎ中心には温もりのある木を配置して柔らかな造形で生命を表現した作品です。

工芸は、それぞれの素材・技法で美の表現を追求していきます。こんな時代だからこそ『自分』と深く深く向き合いこだわり続けたいと感じます。それぞれの分野で新しい作品を来年も期待します。



第74回 全道展 “個の集団” 作品が発するエネルギー

2019年6月12日(水)～6月23日(日)



6月15日授賞式
会場 ANA クラウンプラザホテル札幌

全道美術協会賞新会友 〔絵画〕中澤 文隆＝登別市

生まれも育ちも室蘭で、いつも工場群を眺めながらの生活が絵の題材へと移行したことは、私にとっては自然の流れでした。青年期時代は具象が中心でしたが50代が過ぎた頃から無機質ながら工場がまるで生き物のように見えてくる、そんな自分の感覚が空想の世界へと拡がり現在に至っています。これからの制作については、モノトーンから色彩について挑戦していこうと思います。

北海道新聞社賞新会友 〔絵画〕金子 圭太＝札幌市

今回出品した2点は、対立する拒絶と調和を描いています。タイトルのHTMLをベースとした架空の言語は、視覚情報をテキストデータによってマークアップし、支持体や描画材による手仕事とは違ったアプローチとして機能させています。絵画空間と鑑賞者との仲介役とっていただければ幸いです。

北海道新聞社賞 〔彫刻〕梅田 力＝北広島市

形に純粋に向き合うために、意味やコンセプト、物語性、政治的主張といったものを「形に付随するもの」と考え、それらを彫刻する（削り落とす）ことから、私の制作は始まります。皮肉なもので、こうした態度でものづくりをしていると、かえって芸術を取り巻く様々なものが見えてくるように感じています。

八木賞新会友 〔絵画〕佐々木 剛＝札幌市

作品のテーマは「見えるものについて」と「対象と光について」です。

対象は自分の中に存在するもの、よきものと思えるものでないことと取り込めないようです。

教員をしているので、学生のいない場所から、ヌードを描いています。

佳作賞新会友 〔絵画〕桔梗智恵美＝滝川市

描きたい、と思うモノゴトは、期間限定で忘れてしまうような「ぐるりの記憶」であることが多いです。これまで仕事や育児、日常生活の中で行き詰まった時に、いろんな生き方をしながら絵を描く人達に出会ってデッサンをし、絵の話をすることで、あの頃の私は生きのびました。これからも、自分自身の絵画空間を追求し、私なりの道の歩き方を探していきたいと思います。

佳作賞 〔絵画〕本山 タイ＝新ひだか町

今年もテーマは、「今、生きているということ」に決めていたが、絵作りで、画面構成や色調をどうするか悩み苦しんだ。眼下に広がる太平洋は、刻一刻と姿を変えていく。見つめていると人生の旅路を思わせる。今年の春は穏やかな日々が続き、優しい潮騒の詩と海鳥の鳴き声に慰され励まされた。「あい」の言葉が持つ数々の深い語

源に心ひかれて、とにかく夢中で描いた。

佳作賞 〔版画〕渡邊 仙司＝倶知安町

札幌にカラスが多いのは知っていたが、初めて電柱にとまって休むオオセグロカモメの多さにとても驚いた。調べるとススキノなどのビルの屋上が、本来の生息地である海辺の断崖などと似ており繁殖に適した環境だそう。日中カモメは豊平川で魚を食べのんびりと、その隙にカラスは街中でゴミを狙っている。まるでオセロの様に陣地を取り合い、共存する鳥が作品の題材となりました。

佳作賞 〔版画〕浅野 美江＝札幌市

一つの作品を作り終えた時、それがその時の自分自身の実力のあることを実感すると共に、新たなスタート地点に立ったような気持ちになり、そこから次の作品への模索が始まる。日々限られた時間の中で継続していくことで前進できるような気もする。昨年後期高齢者となった私ではあるが、残された時を、体が動かなくなる迄、果てしなく遠く深いこの道を歩み続けていこうと思う。

佳作賞 〔工芸〕宮本瑠美子＝北広島市

織りには様々な技法があり、英字本の写真と組織図を頼りに取り組んだ。「Crammed and spaced」、和訳すると「詰込みと間隔」あるいは「ぎゅうぎゅう織り」。(スマホで調べた限りだが……) 縦糸に密集と空をつくり、緯糸を通した時に弛みが出て立体的に見えるようにした。織っている時のワクワクは何を織ろうか悩んでいた事を忘れさせてくれた。

奨励賞 〔絵画〕宮下 淳＝旭川市

日々の生活の中で心の底に沈殿してゆく澱のようなものが時間を経て発酵し発生する二酸化炭素のようにボコリボコリと浮き上がってくるイメージを描きとめることに何の意味があるのかわからずに制作しています。

奨励賞 〔版画〕田中 俊二＝旭川市

版画を始めて、およそ5年が過ぎました。モチーフ探しは大変で、見る物すべてが版画にしたらどうなるのかと頭の中で色を重ねることから始まります。

今回は、大相撲巡業を観た際の、肉体と化粧まわし姿の雄々しさを彫ることにしました。

どのように表現すべきなのか、自分らしさ（オリジナリティ）とは何なのか、日々模索中です。

奨励賞 〔彫刻〕齊藤 眞紘＝釧路市

湿原を見ると水の上に草花が咲き木が茂り、空を見ると雲は風に流されて。雨が止むと虹が湿原を包み蝶、トンボ、カエルや昆虫。川の中は小魚、水草など別世界だ。これらの生命は生き生きとまた死んだ草木、小魚など良

く循環しているものと思う。作品の三角体は生命の行きかう回廊。また真ん中の彫刻は生命の源。湿原の生と死を表現したかった。老いてまだまだ反省しガンバル。

奨励賞 〔工芸〕陳^{チェン} 俞沁^{ユチン}＝小樽市

私は1年前北海道に来ました。今回は私にとって初めての作品です。作品は葉についた朝露を表現しました。“生命は短い、今を大切に”の意味です。そして今回、奨励賞をいただきました。これは私の前に進める活力となります。また来年も頑張ります。謝謝・我會加油！

会友賞 〔絵画〕松本眞智子＝札幌市

海辺の倉庫が俯瞰した暗い風景の中に天も地もなく漂いうごめく…そんな絵に魅了され外山ムツ子先生と出会い全道展出品となった。今も心に残るのは「せめて絵の中では非常識になりなさい」と話されていた事だ。既成概念に囚われず心を解放し作品として具現化する事は私にとって困難な作業だった。今回の受賞作「Water Vein」今後も私なりの「水脈」を追求したい。

会友賞 〔絵画〕佐々木ゆか＝札幌市

水をモチーフにしたのは5年程前からでした。その頃身近な人が病に罹りました。日に日に死に近づいていくのを見続けるのが恐くなった未熟な私は逃げる様に離れていきました。罪悪感や自己嫌悪の毎日に贖罪の意味を込め水に浸かる人物作品を描き続けました。1年1年制作で向き合い、その心が昇華していきました。今作はそれらの万感の思いを込めて制作しました。

会友賞 〔版画〕志摩 利希＝札幌市

十歳でドライポイントを体験して以来五十年余銅版の線に導かれ、製版した後の初刷の高揚感を糧に制作を続けてる。今はアクアチントの明暗表現と東洋的な平面的表現の折り合いを模索し続けている。人生の孤独、哀愁、希望など北の街に生きる心をよぎるイメージを感じてもらえるよう努力したい。タイトルにある、アナベルはポーの詩の中の少女の名であり、白いアジサイの名でもあります。



談笑の輪が広がる会場

今年もギャラリートーク開催

—— 観賞を深めるために ——

創

シリーズ化のなかでの発見

〔絵画〕八子 直子

子供シリーズもあと数年で四半世紀になろうとしています。私は飽き性なのと短気も手伝って同じ事が続かないと思っていたのですが……トークのため切り口を探って一連の作品を見直してみると気付いたことがありました。モデルが幼児までの頃は付き合いが薄い分、公的で大きいくりでの像として追っている。それが年数が進むにつれ私的で名の付く一人の人格として追っているということ。これを発見したことはこれからの自分に大きな収穫でした。この企画で色々調整いただいた皆さんにとても感謝しています。



陶

遅いスタート、でも無我夢中だった

〔工芸〕石山 和雄

今から48年前、丹波焼の窯元で登窯や製作現場を見たのが陶芸との出会だったと思う。この時買ったトックリとグイ飲みを今も持っている。しかし陶芸を始めたのは、40才になってから。職場にあった陶芸部に入って初めて粘土に触った時は、なんとも不思議な感触だったのが思われます。それ以降、無我夢中で没頭した。全道展に出始めて50周年記念展で佳作賞を受賞。佳作賞の意味が判らないまま受賞式に出席したものです。最近、良い作品を作りたいと思いつつも、創作意欲の減退で作れていません。歳のせいかな……。



刷

諸先輩へのオマージュ

〔版画〕吉川 勝久

私の場合、全道展に出品する作品の大半は、最初は具体的なモチーフやテーマを持たず、まっさらな用紙に落書きすることから始め、湧いてくるイメージを重ねては消した重ね……心の沼にもやる霧に形を与えていくように作成しています。

そのため、ただ笑われるだけの作品になるやも知れず……それを受け入れてきていただいた全道展には感謝しかありません。

今回の作品は、可能性の窓を一つずつ閉めていく年代に入った我々世代と諸先輩へのオマージュのような作品になりました。

ある種の寂寥感、築き上げて来たものへの自負、そして今見つめるもの……構築物のようなでもあり1本の樹のようでもあるイメージが重なりました……。



最近絵画の方々の刺激も受け、木版画の枠を少し壊す試みもしながら作成しています。

……というようなことを、実際の制作過程に沿って話させていただきました。

彫

テラコッタの魅力を伝えたい

〔彫刻〕小野寺紀子

テラコッタは、木彫、石彫、塑像などに比べ手がけやすい技法です。制作プロセスの紹介でより多くの方に取組んでもらえたらと考え、芯の作り方などの説明を試みました。写真のファイルを用意しましたが、後方の方々にはご覧頂けず申し訳ない思いました。



今年の自作は、陶芸家のモデルの内面をかたちにできたらと首を僅かに傾け、いつもより小振りの胸像にしてみました。これからも人体の美しさをご覧下さった方々と共有できる作品を目差し、創り続けたい私です。



トークに聞き入る人たち

6月13日、突然の旅立ちであった。昨秋には帯広美術館等で大規模な展覧会を開催したばかり。全道展のみならず北海道の彫刻界に大きな衝撃である。7月31日に全道展の仲間や関係者ら約100名が出席しての偲ぶ会が催された。その功績と人柄に思いをはせ、近しかった方々からの哀惜の言葉を届けます。

〔絵画〕近藤みどり＝帯広市

私が高校生の時、兄が教育大山岳部で遭難し、その時お世話になった。大学卒業後、20数年ぶりに帯広で再会。昔のままだった。奥様の雅子さんが病気とわかった頃、私の主人も癌になり「雅子さんどうしているかな」と気遣う夫を連れて訪ねたりもした。広い庭は雑草一本無く、家の中はいつも片付いて、料理も上手だった。「べったら漬け」「煮豆」など、必ず何か持たせてくれ、今年のお正月には絶品の「白花豆のきんとん」が届いた。「みどりちゃん」と言って妹の様に可愛がってもらったので、心に大きな穴が開き、どうにも淋しい。

〔絵画〕渡邊 禎祥＝帯広市

「禎さん！ 速く、速く」とトイレから出た途端に、いつも元気な淳ちゃんが、絵画部の集合写真整列の前で、大きく手を振って呼んでくれた。恥ずかしい思いで前列の床に座ってチーズ！（第74回審査初日6日）今でも優しく元気な声で、あの声が真逆ぼくに対する最後の声になるとは。大成した彫刻家の淳ちゃんよ！ 本展会期中に突如と黄泉の旅立ちは無いです。誠に不合理であり、悔しく無念でならない。これからは、先に旅立たれた愛妻雅子様の横で楽しく語りながら、気軽な制作を続けられていくことだろう。

〔彫刻〕葦沢 淳一＝札幌市

岡沼先生は、作品が素晴らしいだけではない。審査の時昼食後はいつも「全道展の運営の仕事は札幌圏の人たちにお世話になってばかりで申し訳ない、せめてコーヒーをご馳走させて」と、彫刻部会員全員にコーヒーをご馳走してくれた。気遣いができる人だった。また、ありふれた会話の際にはどこか暖かいものを感じ、包み込むような優しさがあった。人としても一流であった。来年からは会員懇親会の席に岡沼先生の姿はない。そう思うととても寂しい。また一緒に酒を飲みたかった。もっとたくさん話をしたかった。

〔絵画〕齊藤 隆博＝帯広市

突然の訃報で十勝地区会は大きな柱を無くし途方に暮れています。「俺は木が語りかけてくれるまで待つ」「木が望むように彫るのさ」自然を愛し妥協を許さない姿勢を貫き、普段は優しい笑顔の岡沼さん。見事に光と影を演出した個展の後、工房で「この空けたスペースで作品を創る」意欲に燃えていたのに無念です。23回展を迎える地区展を立ち上げ努力された功績は大です。審査最終日ギャラリー出口で握手しました。まるで映画の一シーンのように2室へ作品を置いて逝った貴方の手の温もりが忘れられません。ご冥福をお祈りいたします。



山頂に立つ学生時代の岡沼さん

〔彫刻〕谷内 健＝国立市

昨秋、音更の工房に初めてお邪魔した。陳列の手伝いが出来ればと前日に伺ったのだが準備はほぼ整っていて手伝うどころか逆に鳥料理など御馳走になり却って恐縮してしまった。個展は圧巻であった。岡沼さんは埋れ木の声を聞き、そこに十勝の大地から得られたであろう豊かなイメージを重ね合わせたに違いない。先日の審査2日目が始まり慣れない進行役を仰せ付かった私は少し疲れていたのかもしれない、愚かにも岡沼さんに挨拶するのも忘れ会場を後にしてしまった。来年もまた当然の様にあの穏かな笑顔に会えると信じ込んでいたのだった。

〔絵画〕森 弘志＝新得町

6月6日夜。全日空ホテルでは酒が進み、左隣の岡沼さんらを交えての「ビックがビックは」のやり取りを、正面の伏木田さんはうつらうつらニコニコしながら眺めている。翌7日、朝ドラでは天陽君がローカル展で受賞して、我々の2日目の審査が始まった。昼、すれ違いざまに岡沼さんから声をかけられ、前夜の事で笑った後「でね、その、いやまた後で」「はい帰ってから」何用かは分らないまま、いつもの2日間は最後になった。

〔彫刻〕伊藤 隆弘＝長沼町

全道展彫刻部に於ける昭和のレガシーといえは本郷新氏、本田明二氏を彷彿とさせる。

作品もさることながら、その人となりは親分肌であり、多くの人をひきつける性格であったと伝え聞くにあたり、私は岡沼淳一さんについても同じものを感じる。

氏は全道展では常に大作を発表し続け、審査では厳しくも常に愛情深く、いつでも彫刻部を牽引し続けてくれた。

昨年、帯広美術館と自身のアトリエで大きな個展を成功させ、今年は作品集が出版されると聞いていた。

岡沼淳一氏は私的に言うところ全道展に於ける平成のレガシーの一人であると断言したい。

学生美術全道展 時代の変化に真摯に向き合って 61年の歴史に終止符

若い情熱に突き動かされるように制作し出品した、多くの学生たち。61年の歳月に抱く思いの一端を、主催者の北海道新聞社と、かつての受賞者に寄せていただいた。

美術室に入り浸り、一気に描き上げた抽象画

絵画会員 齊藤 隆博

大雪の山並みをイメージした屋根が印象的な美術館が今ブームだ。私が初めて十勝に教師として赴任した隣町に神田日勝新会員が居た。第4回展で道教育長賞を受賞した2年後だ。この2つが今まで絵を続けたきっかけになっている。油絵初心者が80号のベニヤに一気に抽象画を描き上げた記憶がある。大学で自分をさらけ出し、その本質を追求する絵の姿勢は学んだが、現実とのギャップは大きく美術室に入り浸りの日々だった。最近は学生の全道展入選は珍しくない。これが会の活性化に繋がればと思う。残念ながら学生美術全道展は今年で幕を下ろすが、全道の美術文化を支える作家を輩出した功績は事実だし当分出身者が活躍すると信じる。人を生かすことは容易ではない。運営に携わった方々に頭が下がる。



第4回入賞作品と

豊かな土壌があり応募は自然な流れ

絵画会員 佐野 忠男

私が学生の頃、函館の画壇は全道展の創立会員の方々が健在で、多方面で精力的に活動していました。

その後に続く次世代の多くの先輩方が全道展で数々の賞を受け熱気に包まれていました。そんな中、意欲的に制作する姿を目の当たりにして、我々学生達は学生美術全道展への応募は自然の流れのようであったと思います。



後列左が私、中央は岡沼淳一、前列左は隅田重明

第6回展と第7回展で北海道教育長賞をいただくことが出来ました。石膏とペンキを混ぜてベニヤ板の下地に描いた絵は色の発色が鈍い、画肌が荒いなどと、ご指摘をいただきましたが、半世紀以上過ぎた今でも布地に替わっただけでそれらの課題は解決できずに悪戦苦闘の日々です。

進路を決める契機に

絵画会友 佐々木ゆか

私が出品したのは第47回、第48回展でした。北星学園女子高校で顧問の波田浩司先生から熱心な指導を受け油絵を描く楽しさを学びました。高校2年の時学生美術全道展で優秀賞を頂きました。初めての市民ギャラリーは沢山の作品と会員の先生からの講評で刺激的でした。それが楽しかったのか悩んでいた進路も迷わず美大進学にしました。来年は最高賞！を目標に熱中し、結果は奨励賞、嬉しいけど悔しい、次は本展で受賞を！と続けていたら15年。こうして社会人となった今も全道展に出品しています。学生展に向けての夏休み合宿もいい思い出です。学生美術全道展のおかげで何かに挑戦を続ける大切さを学ぶ事ができました。

環境の変化があっても

絵画一般 木村 麻衣

学生美術全道展が終了すると知り驚いている。存在を知った高校生の頃は出品されている絵の大きさと迫力に圧倒された。学生の中には学生展を目標に技術を磨き、切磋琢磨している人もいたのではないのでしょうか。私は大学生時代に所属した研究室がきっかけで学生展及び全道展に出品した。初出品は銅版画だった。技術不足の私に会員の方々は熱心に講評して下さい、その後もサポートを受けることができた。その翌年の出品作は思いがけないほどの賞をいただいた。今は一般社会人となり思い通りに制作が進まない状況が続いている。でも環境が変わっても絵の道を歩み続けようと思えるのは間違いなく、学生美術全道展のおかげだと思っている。

絵画制作のきっかけ～感謝

絵画会員 土井 善範

当時、丸井デパート最上階催し物会場へ、エスカレーターを登りきると、学生美術全道展の作品が所狭しと陳列されていた。運よく第16回「ハットさんの家族」奨励賞、第17回「家族」協会賞、第18回「家族B」協会賞を頂いた。遠藤ミマン氏、福井正治氏、岸本裕躬氏からの講評は今も宝だ。教育大は教育実習がある為、9月末まで長い夏休みに入る。彫刻研究室の先輩達から「毎年学校で制作し学生展に大勢が出品している。絵画研究室も頑張ってみたら……」と声を掛けられ挑戦した結果だった。その後、「卒業したら全道展だね！」と周りから励まされ……今日に至る。いつも傍らに絵画制作があるという幸福（時に不幸？）な私の人生は、学生美術全道展がきっかけであったと思う。感謝。

初受賞は鮮明な記憶

版画会友 木全 佑衣

61回に及ぶ歴史ある学生美術全道展が幕を下ろすというのは、とても悲しく感慨深いです。高校生の頃、初めて賞を頂いた時の喜びを今でも覚えています。

これまで学生美術全道展を長年支えて下さった皆さまに感謝申し上げます。審査や設営、運営などたくさんの方々の協力で毎年開催されていた事を改めて実感します。ありがとうございました。

全道展には新しい風が吹き、より一層エネルギッシュな作品であふれる展示になることを願っています。

過去、厳しい現実の現在そして未来は……

絵画会員 川口 浩

40 数年も前のことで詳細はもう覚えていないが、地方の高校の美術部にいた私は、諸先輩が続けて受賞していた関係で一度だけ出品した経緯である。㊦今井テパートの上階で行われた展覧会は、大きな作品がたくさん並び、会場は行儀のよい高文連全道大会作品展と違う楽しさとエネルギーに満ちていて大いに感心したが、同時に多少の違和感も覚えていた。それは何だったのだろうか……？ 力任せの声高の作品たちに畏怖したのだろうか？ やっと対象を描いていた自分と、既に違う視点で絵作りを始めていた幾人かの出品者とのレベルの違いに驚き焦心したのだろうか……？ そんな学生美術全道展が終わる。高等学校美術部活動では外せない高文連美術展以外で、学芸展が選択の対象になることが難しいのが現実である。寂しいが現実なのである。

学生美術全道展がなくなっても全道展に挑戦

絵画会員 川本ヤスヒロ

私が学生美術全道展に初出品したのは、高校1年の夏、第8回展であった。応募作品は1232点で2日間の審査が行われ、私は落選した。この時、最高賞の文部大臣賞を受賞したのは元全道展会員の安田侃、知事賞に石原佑一（現会員）、道教育賞に井出むつ（10回展最高賞）、奨励賞に長谷由美子（12回展最高賞）、入選に加藤寛之、山本恒二（2人は現会員）がいた。私は14回展で最高賞を受賞したが、多くの人達がこの学生展を経験し全道展に挑戦してきた。昨年60回展の搬入点数は146点と減少したが受賞作品のレベルは高い。61回展で学生美術全道展は長い歴史に幕を閉じるが、U21、高文連などの展覧会に出品しながら、是非、大作で全道展に挑戦してほしいと心から願う。

我が青春の1ページ

絵画会員 波田 浩司

第29回展は、応募総数が370点で、審査の結果232点が入選し、北海高校は3名が受賞という成績でした。当時の顧問である川本康博先生は、北海機関紙に、『文部大臣賞を受けた1年生の波田浩司「顔」が目を引く。画面は茶系の色調でまとめており、画面いっぱい顔に構成したところなどは、大胆な造形意識が感じられる。授業や部活のデッサンをみても基礎がしっかりしており、これからの制作に期待する』と講評を寄せていただき、その後も全道展や学生美術全道展に向け一途に努力したと記憶している。

たいてい、出品一週間前になると、美術部全員で前任の枋内忠男先生にも講評していただき、先生の助言等であまりにも専門的用語などは、解らないので積極的に質問したことを今でも懐かしく思う。学生展は青春の一頁でもあります。



第14回学生美術全道展
文部大臣賞受賞作を前に



枋内忠男先生の講評を受ける
美術部員

学生美術全道展——終わりはこれからの始まりだ

若林 直樹（道新文化事業社常務取締役）

忌野清志郎（1951～2009年）のRCサクセション初期の名盤「ぼくの好きな先生」は、都立日野高校美術教師の小林晴雄さんをモデルにした唄だ。職員室に寄りつかず美術教室で煙草をふかしながら絵を描いている先生だが、生徒を親身に思い、美術部在籍でミュージシャンを目指していた清志郎の人生の師だったらしい。小林さんのような先生は北海道にもいただろう。

少子化により学級数が減り、統合や廃校が続く道内の美術教師が減っている。苦勞して美大に入学しても、美術教師になる道は閉ざされる。高校入学しても美術部がなく、芸術科目に美術がない。新潟や瀬戸内など美術の地域活性化イベントが盛り上がっているが、感受性豊かな高校生が教師を通して美術に接する環境がなくなっている。

この影響なのか学生美術全道展（以下学生展）の出品数が年々減少してきた。1995年500点を超えた出品数が2018年には146点まで減少した。出品する高校も限られてきて、音威子府以外の地方の高校名は入賞・入選記事からほぼ消え

た。この2年間、全道展事務局と一緒に高校の美術教師と話す機会やアンケートを通して美術教師問題以外の理由が見えてきた。小サイズの道展U21への出品、高文連や前後期制により制作する時間がとれない、予算削減によって輸送費が捻出できない。大作品を制作する場所がない等々だ。

1960年に第1回展を開催した学生展は、全道展会員が審査し、作品サイズの制限がない、団体でなく個人の作品を審査するといった「大人」の公募展と同じ審査形式で60年間続いてきた。川本ヤスヒロ氏、川口浩氏、土井善範氏、波田浩司氏ら学生展を登竜門として、全道展会員として活躍している作家が少なくない。道展の会員となった作家もいる。世界的な彫刻家安田侃さんは1966年第8回展で最高賞文部大臣賞を受賞している。

全国的に例がなく、北海道美術界に貢献してきた学生展を再生させることができないかと主催者として有能な部下である高野遼さんと悩んできた。小サイズ部門新設や開催時期の変更など事務局会議で話題となったが、「未来を担う美術家を

育てる」全道展の使命をどう持続することを念頭に考えてきた。学生展で活躍しても卒業後は道展に出品するケースが多いことも以前から気になっていた。それよりも出品数、入場者数が減っている全道展（以下本展）のことを中心に考えるべきではないかと自分なりの方向性が出てきた。

事務局会議で田崎事務局長が学生展を終了することを英断し、拡大会務委、総会で、承認された。会員の多くは本音では学生展を残したい気持ちがあっただろう。今後の本展では学生の出品料を学生展と同額にし、美術館協力会からは賞を続けていただくことになった。本展で学生を含めて若い層を育てるために何ができるかを考えていかなければならない。すでに20歳の出品者が上位入賞を果たしている。若い世代が出品し、従来の出品者に刺激を与えることは明確だ。本展で若い作家は活躍する可能性は充分ある。

20歳そこそこで夭折した村山槐多や関根正二、青木繁「海の幸」は22歳頃、萬鉄五郎「裸体美人」は東京美術学校卒業制作作品、Zozotown前澤社長が落札したパスキアの作品は22歳頃の制作、若くして描かれた作品に私たちは魅了されてきた。2020年「個の集団—第75回全道展」を期待したい。



My History あの日 あの時



カット 本城義雄

原点の色は“黒”

〔絵画〕 深谷 榮樹＝釧路市



月夜の浜と
ストーブを
描いていた当時
(41 回展)

全道展の初入選は北海道立近代美術館がオープンした時の 32 回展であった。初出品は前年で、落選の洗礼を受けたのだからこの時の感動は一生忘れられない。

私は十勝管内の清水町という農村地帯で生まれた。今は廃校になった「松沢小学校」の近くでいつも日高山脈を見ながら生活していた。

最近というより、以前から僕の絵は黒い！ 暗い！という感想が寄せられる事が多く、あまり目立たないというのが率直なところかと思う。それはなぜだろうと考えてみた。ひとつは出生時の事をいつか母親に聞いたところ「あれは終戦の翌年の秋深い頃、畑仕事の最中に産気づいた」つまり黒土の中から生まれた。

2 つ目は鉄道との関係、高校卒業と共に就職した先が魚の匂いと石炭の街。仕事は蒸気機関車 (SL) の掃除から毎日、真黒になって働きながらも絵を描く楽しみがあり、仲間も増えていった。そんな時間を過ごしていたある日、彫刻の斉藤一明会員から全道展に出品を勧められ、枕木、スコップ、石炭ストーブなどを組み合わせた「静物」100 号を出品し入選。メーンの色は石炭の黒、それと燃える炎の赤。斉藤先生は大地の匂いがするような絵がいいね、と励ましてくれた。その言葉が今も僕の原動力となっている。

3 つ目は湿原との出会いだろうと思う。こちらへ来た頃はサバンナのような何も無い風景、とただ通りすぎていたが今では多くの生き物の命の泉だと思う。実は湿原にも黒い美しい層があるのをご存じだろうか。古代から積み重ねられた“泥炭層”で 1 年に 1 ミリメートルしか造られない層が水辺で見られる。数千年前からの空気がここにはあるのだ。

私は生まれた時からの黒色との出会いに運命的なものを感じる。これからも本物の色が出せるかの挑戦を続けていくつもりだ。泥くさい仕事を通じてこそ、その先に輝く美を求めていきたい。

版画を始めた理由

〔版画〕 大高 操＝恵庭市



試行錯誤をくり返した
仕事場で

私は 21 才のとき 1961 年独学で油絵を始めた。1963 年 18 回全道展初出品初入選 25 回展まで。26 回展より銅版画出品、現在に至る。

版画を制作するようになったのは素晴らしい版画を見てそれに感動したからではない。

油絵を始めたころから、私の中で表現空間が小画面の表現媒体を模索していた。そこで銅版画を始めようと 1964 年エッチングプレス機と道具一式を購入した。だが、知識も制作技法もなくそのまま放置状態にしていた。本格的に制作を始めたのは購入してから 6 年経過していた。次に銅板の入手も困難で、傷のないところを選び自分の望む寸法に裁断、1 枚の銅板を得るのに長時間を要した。当初は技法書もなく、銅版画の講習を受けたことがなく、腐蝕液の取扱いのことなど試行錯誤の連続だった。ようやく、磨く、刻み、削り、腐蝕し複雑でもどかしいプロセスを通してイメージを硬質な銅版の中へ封じ込められるようになったころ、仕事の関係で東京転勤になり、自宅での制作が不可能になった。次の技法として直接技法のドライポイント、ビュラン、メゾチントを試みた。その中で心惹かれたのがメゾチントだった。銅板をベルソーで丹念に目立ていくと、銅板が銅版に変化していく。しかし、大変なのはそれからである。黒から白までのハーフトーン・ハイトーンをバニッシャー、スクレーパーで決める技はやればやるほど深いものだと感ずる。銅版のもつ精緻でピロードのような深い暗闇から光を取り出す精妙に得られる階調は他の技法ではなしえない。又この技法は途中で訂正が許されない。明快で厳密な計画が要求される。そこに魅力を感じる。プレス機を通して紙をめくるとき版画をつくる楽しみはこの瞬間にある。

ART STAGE

—作家の痕跡—

故岸本裕躬回顧展・羽山雅愉展から

「心の中の像」と「現実の像」というのがある。制作するときそのふたつの間の緊張関係を自分の内部で常に意識していなければならない。そこには人間の内部におけるふたつの世界の分裂と矛盾から生まれる苦悩がある。絵を描く者に立ちふさがる大きな課題でもある。

深川市アートホール東洲館館長・全道展会員 渡辺 貞之



●岸本裕躬回顧展（5月2日～5月15日）

2011年に亡くなった作家。たえず「生命の有り様」「存在の確かさ」を模索し続けた作家。生前、氏がいていた「魂の不確かさ、この世に存在している私は……一見何を描いているのか分からない画面。虫や動物の眼から見る世界。奇妙な花、深い森の湿地帯にうごめく生命の気配。何気なくすれ違った人間の残像と存在。祖父と孫の不思議な血縁情感……。岸本氏が実現しようと試みたのは現実には形として存在しないもののある物質の中に捉えようとする、表現の本質的な意味が「未完成的な表現」として現れたのだと思うのです。それは物質と魂との闘争というほとんど宗教的といっているヴィジョンにきわめてよく適合するもので、未完成的な表現は「完成」作品では決して表現する事のできない重要な意味を持つのだと思います。それは不十分にも思える表現どころか、芸術家の創造の最も根源の秘密を私たちに提示しているのです。



●羽山雅愉展（7月3日～7月15日）

近年、羽山氏は抜けるような透明感のある清楚な表現で小樽の風景を描いています。それは現実のリアリティを抑えたストイック的ともいえる表現です。

人はどのような場面でも、決して無垢の眼で外界を眺めているわけではありません。まして絵を描く者の眼は、カメラのように単に受動的に外の世界を受け入れているのではなく、その眼を通してある形を認識する時には、必ず描く者の方からの能動的な働きかけが加わるのです。端的に言えば私たちは「探しているとき」にだけ「形」を知覚することができるのです。

羽山氏はある「図式」に基づいて世界を認識し、その認識の過程で自己の「図式」を修正し、また新しい「図式」を作り出していくのでしょう。

今年度開催の展覧会

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| ■高橋三加子展 10月17日～31日 | ■銅版画二人展（佐藤麗子・坂みち代） 11月2日～15日 |
| ■石本久美子展 11月2日～15日 | ■谷口一芳回顧展 1月17日～31日 |

平成最後に記念の 20 回展

函館地区会事務局 安井 孝

平成 31 年 1 月 22 日(火)～1 月 28 日(月)函館市芸術ホールギャラリーに於いて全道展第 20 回函館地区展が開催されました。出品数は一人 1 点で 42 点。厳寒期ながら会期中は幸い比較的穏やかな天気に恵まれ入場者も前回展を上回り盛況の内に終わりました。平成最後の年に区切りの 20 回展となりました。

さて、私事になりますが、平成 22 年 1 月の第 11 回函館地区展から任期 2 年の函館地区展事務局長を引き受けて 10 年が過ぎてしまいました。その間、全道展・地区展関係者・主催の北海道新聞函館支社・協賛の各機関・広告などで協力していただいた各企業のご支援と来場者の皆さんに心から感謝したいと思います。

この 10 年を顧みますと社会状況も大きく変化し、美術界でも作家の高齢化などきびしい現実を抱えています。年号が変わり、20 回という節目の展覧会が終了したこの時点で事務局長を退くことにし総会で了承を得ました。次期事務局体制は現時点で未定です。現在検討中。

新事務局には地区展のあり方・開催時期の問題などいろいろな課題がありますが、解決に向けて積極的に活動していただくよう期待しております。



全道展第 9 回新鋭展

— 大通美術館 (B・C 室) —

会期 2019 年 11 月 20 日(水)～11 月 25 日(月)

■搬入 11 月 19 日(火) ■搬出 11 月 25 日(月)

※オープニングパーティ、ミニギャラリートークと会員による講評会を実施します。

全道展 充実のホームページ

全道美術協会

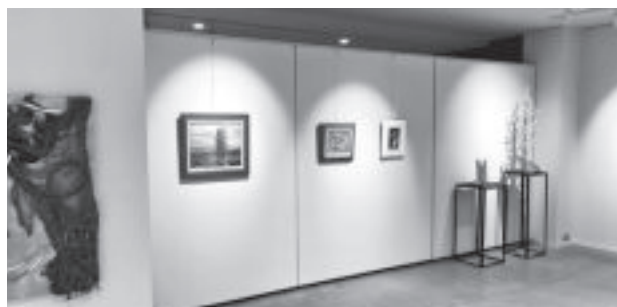
検索

<http://www.zendouten.jp>

移転後初めての地区展

旭川地区会 西村 徳清

全道展旭川地区小品展(会期 6 月 18～23 日)が Gallery Jin produced by ヒラマ画廊で開催された。中通りにあったヒラマ画廊が一条本通りのクリスタルビル 1 階に移転した。以前の倍程度にもなる展示室、さらにはロンドンのナショナルギャラリーを思わせる緋色の壁面を持った一室が設けられている。新たな会場には大作のエスキースとして制作プロセスと一貫性を示すものや、新たなテーマや表現技法に挑戦するものなどが並び、本展と遜色ない個性が対向していた。地方都市においても「みんな仲良くやりましょう」とつつがなく纏まるのではなく、互いに研鑽を重ねる個の集団である『全道展らしさ』を示すことができたのではないかと自負するところである。



2020 年 第 75 回全道展

— 札幌市民ギャラリー — (月曜日休館)

会期 2020 年 6 月 10 日(水)～6 月 21 日(日)

午前 10 時～午後 5 時 (最終日は午後 4 時 30 分)

■入場料金 当日券 800 円・前売券 600 円

23 歳以下、障がい者無料

■出品料 3 点まで 8000 円、1 点追加ごとに 1000 円

※ 23 歳以下の出品料を半額とします

(1997 年 4 月 2 日以降に生まれた方)

■搬入 6 月 2 日(火)・3 日(水)

■賞 75 周年記念賞・全道美術協会賞・北海道新聞社賞・八木賞・佳作賞・奨励賞

※ 6 月 13 日(土)講評会、授賞式及びパーティがあります。

編集後記

「ZEN」はこれまで多くの方々に寄稿を依頼し協力いただいていた。岡沼淳一さんは 3 年前、書きたい作家がいる、と二つ返事で快諾して下さった。52 号「ZEN 紙上美術館」を再読し改めて急逝を悼む。酷暑の 8 月 2 日、絵画の藤井高志会員ご逝去の報に接する。合掌。

〈(文責) 米澤・川本(ヤ)・澁谷〉